

---

# 騎士と鈍感っ子（仮）

広い世界にちっぽけな人間。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士と鈍感っ子（仮）

### 【Zマーク】

Z8580W

### 【作者名】

広い世界にちっぽけな人間。

### 【あらすじ】

急に異世界とりつぶしてしまった「篠原凜」は膨大な魔力を有していることがわかる。しかし、最初に言葉が通じなかつたせいで男装をするはめに・・・

## 1 (前書き)

処女作です。駄文です。筆者的好きな要素でんこもりで書いてみました。

感想などいただけると泣いて喜びます。

「…………？」

と、座り込んでテンプレートな発言をするのは、「ビリビリでもこの  
「」く普通の「女子高生、  
篠原凜だ。

こんなはずではなかつた。  
と凜は考える。

時は一時間前に遡る・・・

\* \* \* \* \*

「　「　「凜様ーー。」きげんよーうーー。」

「ああ、また。」

そう答へ、僅かにほほ笑むと、遠くで黄色い声が上がる。  
別段、そのようなつもりはない。  
し、そのような趣味もない。

が、この「篠原凜」という女は男にみられる。

「いいのよ、凜はー男は男でも『美少年』だからー。」  
と中学からの親友は力説するが、フォローの出し方を間違えている。

確かに、この容姿は男に間違えられても仕方がない。

髪はベリーショートだし、身長も170センチにもなるひとつひとつといふである。

中高一貫の、この女子高に男がいるはずがないのだが、凛は毎日のように舌白を受け続ける。

この容姿が気に入らないわけではない。  
だが、勇氣をだし、精いっぱいの思いを凛にぶつけたてくれた子たちに対して申し訳ないのである。

「やつこは現実を見て強くなつていくのよー。」

・・・また、フォローの出し方を間違えている。

訂正するのも疲れ、早々に帰宅しようと考える。

廊下を歩けば、熱い視線が突き刺さり、  
数少ない知り合いで声をかけよつものなら周りにいた子が倒れる音  
が聞こえる。

そんな、一風変わつてはいるが、凛にとっては「日常」がいつも通り過ぎていくはずだった。

途中で雨が降り出す。

雨に濡れながら歩くのは嫌いではないが、今はまよい。  
風邪気味のこの体に鞭打つてまで楽しむほどのが趣味ではない。

「ヤバいな・・・

雨脚が強くなり、そんなつぶやきが零れる。

そろそろ走ろうかと思つていたとき不意に田の前が真っ暗になり、  
・・・光で何も見えなくなつた

\* \* \* \* \*

そして、今に至る。

首筋には冷たい感触がして、動けば ちり、と僅かな痛みがはしる。

「なんで・・・?」

後ろに感じる殺氣をそのままにもしておけず、  
ゆっくりと振り返り、上をみあげる。

後ろにいたのは「超絶」がつくであろう顔の整った御仁である。

深緑色の髪に、筋の通つた鼻梁。

灰海色の瞳は強烈な意志を持つてこちらを見つめていた。

——きれいだな、この人も女の子に騒がれるのかな

と、命の危機が迫つてゐるらしいこの場には似合わぬ感想を抱いて  
いると、  
何か叫ばれた。

「○ × # \$ % & · @ - · ?」

「え・・・？」

何を言つてゐるのかわからない。  
ひどく怒つてゐることは表情から感じられるが、言葉が通じない。  
途端に恐怖がこみ上げる。

「 \$ ○ × # \$ % & · @ - · ?」

「なにを、いつてゐの・・・」

呆けた様子の私を見て、向こうはすっと剣をひいて、後ろに下がつた。

「 \$ % ○ × \$ # & · · ·」

何かをつぶやき、そのまま大きく剣を振りかぶる。

「 もわかなないよくなといひで、死ぬのはいやだな  
と思いつつも、凛は静かに目を開じる。

・・・が、一向に衝撃がこないのを訝しく思い、目をあける。

「ひやら男はもう一人いたようだ。

こちの男も美形である。

白銀の長髪で、細田でほほ笑んでゐるために、田の色は分からぬ。

「 # \* @ + ~」

間延びした声で、先ほどの男を止めていたようだ。

「 ○ × !? ！」

口論をやめて、元気なつてきた。

ああ、風邪、もつとしつかり治しておけばよかつたな

と凛は思い、意識が遠くなつていぐ。

最後に見たのは驚いた様子の一人の男の目だった。

## 1 (後書き)

誤字・脱字・感想心よりお待ちしております。

## 2（前書き）

とつあえず書けました・・・汗  
私の駄文を読んでくださる方がいることに感謝します

「おー、帰るぞ。」

「えーもつ少し居ようよ、  
帰つてもどうせあのつまんないやつでしょ？」

「・・・サボるな。」

「バレた？』

と悪びれずに笑うのは俺の弓のパートナーだ。

王国騎士団では、「弓」「剣」「魔術」の三部署の新人から  
一人づつ選び、パーティーを組ませる。

多種多様な任務にもこのパーティーで取り組む。

組む目的は「お互いの長所を生かし、任務遂行をより確実なものに  
する」ためであるらしい。

しかし、俺たちのパーティーには魔術師がいない。

通常、パーティーは各自の力量を考慮し、組まれる。

しかし、俺たちの場合、俺たちに見合つ魔術師がいなかつた。

俺は傲りや自己陶酔ではなく、自分のことを強いと自負している。  
それはこのパートナーにも言える。

弓の腕は確かだ。俺のパーティーに選ばれるくらいなのだから。

しかし、この性格には辟易する。

鍛錬はサボろうとするし、  
女を見かければ誰それと構わず声をかける。

—女は苦手だ。

厚かましいし、直ぐに泣く。

些細なことで怒り、喚いて己の正当性を主張する。

—魔術師が女だったら

そんなことを考え、一瞬鳥肌がたつ。  
だが、騎士団は女は入れない。

そのことを思い出し、安心する。

と、

—爆音がしたー

とも考へることができないほどすぐに、  
膨大な魔力を感じた。

思わずパートナーと目を見合させ、馬を向かわせた。

そこにいたのは、一人の人間だった。

\* \* \* \* \*

これほど強い魔力を持つた魔獣でもあつたならば殺さなければならぬいため、些か安心して呼びかける。

「おい、そこのお前。」

人間は動かない。

「おい！ 聞いているのか！」

威嚇の意味も込め、馬を下りて首筋に剣をあてる。

ふ、と空気が変わり、ゆっくりと振り返った。

吸い込まれそうだ

時間が止まった気がした。

そこにあつたのは零れ落ちそうに大きく見開かれた漆黒の瞳。

一瞬でも体が思い通りに動かなかつたことに驚き、苛立つ。更に強い調子で問いかける。

「お前どこから入ってきた！？」

ここは騎士団管理の進入禁止区域だ。

こんなひ弱そうな「少年」が簡単に入り込めるような場所ではない。

「答えるー。」

瞳が揺れる。

今まで澄んでいた瞳が恐怖に塗られる。

「そんなに脅したって答えられないだろー？」

パートナーが話しかけてくる。

「だが、ここにいる時点でおかしく。」

「落ち着けつてー」

帰れなことにも苛立ち、少年の狂暴を見せる。

と、少年がゆっくりと倒れた。

「」「?..」「

氣絶したふりをしているだけかもしねない。  
警戒を解かぬまま近づく。

少年は短く荒い息を繰り返していた。

「おー」

呼びかけるがピクリとも動かない。

額に手をあてると酷く熱かった。

「ちっ・・・しゃつがない。持ち帰るだ。

お前運べ。」

「えー荷物が多くし無理だよ

確かに見ればパートナーの馬には多くの積荷があった。

「くそつ

ひざ裏と背中に手を回し、持ち上げる。少年は驚くほどに軽かった。

しかし、意識を失つても、未だその強い魔力は感じることができた。

「戻るぞ。」

「はいはい

一面倒なものを拾つてしまつた

その時には俺にはその程度の認識しかなかつた。

## 2 (後書き)

感想いただけだと泣いて喜びます  
誤字・脱字ありましたら指摘お願いします

9 / 25 誤字(?) 訂正

### 3（前書き）

今日は若干ギャグ風味？

未だに男主人公の名前が出せない・・・汗

こんな文章をお気に入り登録してくださった皆様に感謝！

「おかあさん？」

「大丈夫よ、凛。すぐここ、すぐにお迎えに来てあげるから」

温かな手が頭を撫でる。

顔を見ようとするが、ぼやけているよく見えない。

「うんーりん、いいこことしてまつてるー。」

「あうむ、いこい。」

その人は、そういうて呪縛に去つて行つた

「 × —? 」

「 § 。 v 。 」

意識が浮上した。  
誰かが話している。

「 ○ 、 \$ —? 」

「 — — 」

額に冷たいものが触れる。

そのことではつきりと田が覚める。

部屋の光が眩しくて、凜は田を瞬かせた。

「%○、 @ ?」

「 。 # 「

「え？ ちよつ

急に短髪の人があわせつかんで連れて行こうとする。

「あつ

当然、 というべきか、  
立ちくらみがして倒れこんでしまう。

「○ー、 !

凜をベッドに寝かせなおしてくれた人は、  
思わず同性の私でも見惚れるほどの美人だった。

・・・もちろん、

私よりも体に凹凸があるのはいうまでもない。

「 @、 !

美人さんが一人に向かつて何か叫び、  
ドアのほうを指さしている。

どうやら、この部屋からでていけといった意味のことと言っているようだ。

短髪の人は不機嫌に足音高くでていったが、長髪の人は出ていくときによじらを振り返り、満面の笑みで手を振った。

しかし、この笑みには何故か本能で危険を感じた

日本人の特性といつべきか、つい反射で手を振りかえす。

それをみて、満足そうに去つて行つた。

「○」

声を掛けられ、美人さんの存在を思い出す。

何故か、手が光つている。

「なにそれ？」

思わず後ずさる。

美人さんは眦を下げる、なんだか困った様子だ。  
身振り手振りで安全なことを必死に伝えようとしているらしい。

しかたなく、美人さんのほうへと向き直る。

美人さんは凜の頭に光っているほつの手を翳す

「んん！？」

頭の中がかきまぜられているような感覚がある。  
しかし、不快ではない。

搖りおおさまつ

「私の言つてることわかる?『少年』?」

「・・・はい?」

\* \* \* \*

「『』めんねーそつなの、女の子だったのねー」

今さつまのは「魔術」らしく。  
森の中でも感じていたが、  
どうやらこれは、地球ではない場所  
異世界・・・。

「別にいいですよ・・・」

男に見られるのは慣れていた。が、

「女の子の体とは思えなくてー」

「・・・わづですか。」

面と向かっていつも言わるとへじむ。

美人さん ミーナさんというお医者様兼魔術師らしい の話によると

「この国はこの国の騎士団の本拠地で、

私は「不審者」として運び込まれた。

しかし、誠意を示し、力量があれば入隊も認められる。

ちなみに、入隊以外の道は ない。

ここに入った以上、ここからでのには

「騎士」としてか、「死体」としてからしい。だが、寝食が保障され、稽古もつけてもらえるらしいこの場所は行く当てのない凜にとつては最高の場所だ。

「でも、困ったわねー」

「何がですか?」

「この騎士団には女の子は入れないのよー」

「・・・え」

入る気満々であつた凜には寝耳に水である。

「え、じゃミーナさんは「男よ」・・・はいー?」

「だから男つて言つてんじやないー  
何度も言わせないで」

ミーナさんは唇を尖らせる。

こんな表情でも美人だとさまでなる

じゃなくー。

「エヘンしおりつか……」

「エヒね……」

ミーナちゃんがひつじのアーチを這はでて、

「男装ね。」

「え?」

「男装よー。エヒよ、そりあればこいんだわー。」

ミーナちゃんは田を輝かせて私を見る。

「魔術を掛けないとばれるかもしれないから……せうし……あの二人には……」

「み、ミーナちゃん……」

「あ、『めんなさ』」

それから凛は幅の広い布を貰つた。

「いやせ……せひし。ですか……」

凛には必要ない氣もするが一応受け取つておぐ。

「ええ。向にもしなこのも心細いでしょつ~。」

「あつがとつぱりこまかー。」

この世界に来てからの初めての好意だった。

「あのー、」

「なんドリーナさんはそんなに私によくしてくださるですか・・・?  
?」

「氣に入つたからよーそんなん決まつてるじやないー。」

ミーナちゃんは凛の背中をバシバシと叩く。

「うへ、けほつけほつ」

「あー、『めんなさい』?」

「まだもう少し休んでいたほうがいいかも知れないわね

言葉に甘えて、再びベッドへと横たわる。

途端に睡魔が襲い、瞼が重くなる。

「起きた時につてを紹介するわね

「は、い・・・」

凛が完全に眠りについたのを見てからミーナは考える。

(あの魔力、尋常な量ではなかつた)

運ばれたとき、凛からは通常の人間の10倍以上にもなるつかといふ魔力が見えていた。

「面白ことに、なりそつね・・・」

魔術師の呟きは誰にも聞かれることなく、  
静かに空気へと溶けて行つた

### 3 (後書き)

感想いただけだと泣いて喜びます

誤字・脱字・話の矛盾の指摘お願いいたします

#### 4（前書き）

こんな駄文をお気に入り登録してくださっているかたに感謝！

また、副主人公がだせなかつた・・・泣  
でも、このシーンが書きたかつたんです！

「『あんね、凛ちゃん。起きて』

「んー、あと『ふんー・・・』

居心地の良い場所から引き離されるとする手から逃れるよつて寝返りを打つ。

しかし、これは誰の声？

靈がかつた思考が違和感を伝える。

ん？』『うひて

凛はぱつと布団をはねのけた。  
目に入るのは、いつもの見慣れた自分の部屋。  
ではなく、清潔感あふれる白塗りの壁と、ベッド。

「起『じて』めんない？

の人、気の向いた時でもないと『『診て』くれないのー』

「ハーナ、あん。ですよな・・・」

やうこえば、

と昨日のことと思に出す。

気が付いたら森のような場所にいたこと

そこで剣を向けられたこと

不意に、元の世界と友達のことを思い出し、頭が熱くなる。  
でも

「ここに来た理由も、どうすればいいのかもわからない。  
だが泣いて事が変わるわけではない、というのは身に染みている。

「あら、やっぱりもう少し寝ていたほうがよかつたかしら」

ミーナさんが心配してくれている

「いいえ、大丈夫です！」

凛は、自分の弱気を吹き飛ばそつとでもするかのように、  
笑って返事をした。

\* \* \* \*

「それで、今からどこでくんですか？」

一人は部屋を出て、今は廊下を歩いている。

その前に、凛の着替え時に

他の医者が入ってきたそつになつたハプニングはあつたが

(にしても、この世界の人つてみんな背が高い)

元の世界では背が高いことを自負していた凛だが、  
それ違う人は一様に背が高い。

もちろん、女性も例外ではなく、

先ほどの人は2メートルはあつたのではないだろ？

しかし、背の高さだけではなく『発育』もよいようで、（あんなのが普通なら、少年に見られても仕方ないか）と凛は一人ごちる。

「んー、そうね・・・あの人のことはなんて言つたらいいのかしら」

「あの人？」

「凛ちゃんは、その腕じや『剣』も『弓』もできないでしょ？だから、『魔術師』になるのがいいと思つの」

なるほど、その通りである。

すれ違う騎士らしき人物の腕は、筋肉がつき、太さは凛の太ももと同じくらいはあつた。

「そうですね。

それで、『あの人』のところに行つて何をするんですか？」

「それは、人によつて違うから一概には言えないのよ・・・  
ほら、ここよ」

着いたのは重厚な木製ドアの部屋。

飾りはなく、簡素ではあるが位の高い人物の部屋だと思われた。

「頑張つてね」

扉が開く。

「誰じや?」

振り返った人物は  
盲目の老人だった

気が付けば、扉はすでに閉じられていた。

「篠原凜、と申します・・・」

『気品』とでもいうのだろうか、  
老人から滲み出でてくるものに圧倒される。

「ここちに来て座るがいい

言われるままに椅子に座る。

「ハーナから話は聞いてあるかね?」

「人によつて違う、とだけ。」

「ふむ。 そうじゃの。

君にはこれがいいのではないか

差し出されたのは手のひらに載るほどどの水晶玉のようなものであつた。

部屋から差し込む光によつて、何色にも変わるそれこそ、  
凛の田はひきつけられた。

「これを手の上にのせて・・・」

「目を閉じて、その珠に想いを籠めてみなさい」

急な展開についていけないながらも、  
手のひらの珠に集中する。

「おお・・・これは・・・」

老人の声に目を開けると、

先ほどまで部屋には居なかつた人々が  
凛の周囲にほほ笑みながら佇んでいる。

薄い衣を翻し、舞う。舞う。舞う・・・

手元の珠を見ると、強い光を発して輝いていた。

その光景に混乱し、思わず珠を取り落した。

床にここん と落ちる音と共に光と人々は名残惜しそうに消えてい  
つた。

「あの、今のは・・・?」

「精霊たちじゃ」

老人はよほど感動したのか、見開かれた目から零を溢す。

老人の話によれば、

珠の光の強さは魔力の強さ

凛の魔力は王国お抱えの魔術師にも匹敵するらしい

現れた精靈は精靈術に対する力

- これまでに多くの精靈をみたのは久しぶりだとか

魔術と精靈術は今は同一視されているが、

本来はべつべつのものであり、両方の均衡が保たれていればいるほど力の強い魔術師になれる とのこと。

「君は、きっと、きっと良い魔術師になれる」

凛の手を握り、涙を流しながらそう繰り返す。

「・・・これで、わしの役割はおしまいじゃ」

「自分の魔力について聞かれたら、これをおみせなさい」

老人が手を振ると何もない場所からペンダントがでてくる。

「きれい・・・

思わずそんな言葉が凛の口から零れる。

それは銀の鎖に石のペンダントトップが一つというシンプルなものであつたが、

石の色に目を引かれた。

それは、先ほどの水晶玉と似ていて、何色ともいえる不思議な色合いをしていた。

首にかけて、光にかざせばきらりと光る。

「ミーナにも宜しく頼むぞ」

老人は扉のほうを指しながら言ひ。

時間だということなのである。

凛は出て行こうとして、立ち止まって尋ねた。

「あの、お名前を伺つても？」

「もうじやな・・・わしは『守り人』とだけ呼ばれてゐる」

「あつがどいつもこます」

部屋を出でていくとき、

凛の田は、これから希望を含んで強く輝いていた

#### 4 (後書き)

感想いただけだと泣いて喜びます  
誤字・脱字ご指摘お願いいたします

## 5（前書き）

また副主人公（ry

今回は少し長めになつてしましました。

団長出てきましたが、凛を騎士団に入れる以外の役割はありません  
（おい

ミーナさんは扉のすぐ傍で待つていてくれた。  
凛の姿をみつけ、優雅にほほ笑んだ。

が、胸元のペンドントを見つめ、  
僅かに柳眉がよせられる。

「それはしまつておきなさい、凛ちゃん

「は、はい」

一体これがどんな意味を持つといつのであらうか。  
疑問に思いながらもシャツの中へとしまる。

ちなみに今の凛の格好は男子の制服のようなものだ。  
白いワイシャツに、黒のズボン。  
しかし、革の編み上げブーツであることと、  
生地が上質とうががい知れるものであることが  
制服とは一線を画するものであることを示していた。

し、視線が痛い

『守り人』のところへ行き、

緊張が和らぎ、周囲を落ち着いて見る余裕ができていた。

だが、それと同時に視線に気づく。

すれ違うたび、人々 特に女性からの強い視線が向けられるのだ。

「ミ、ミーナさん、早く戻りましょう」

高校の女の子たちからの視線には慣れていだが、ここでの美形な人々に、物珍しそうな目で眺められると落ち着かなくなるのだ。

ミーナは隣で焦ったように速足で歩く隣の少女  
否、少年を見やり、小さくため息をついた。

凛は人々が物珍しさから自分を見てているのだと  
思っているのだろうが、それは違う。

凛は実際目をひく。

しかし、それはいい意味でだ。  
しみひとつない陶器のような肌、  
短くとも絹のようなさわり心地を連想させる髪、  
けぶるような瞳。

しかし、一番目を引くのはその目だった。

少し切れ長な、しかし大きな瞳はこの国では珍しい漆黒で、性別に関わらず人を引き付ける強さと美しさを秘めていた。

周囲の人間が放心状態に落ちるのを見て

ミーナはしづしの間楽しんだ。

(だが、)

とミーナは笑みを消し、真剣に考える。

凛が守り人からもらった石は、貴水晶だ。

見たときには思わず息を呑んだ。

貴水晶は「神の涙」とも呼ばれるほど希少で、魔術師の力を表す石としては最高ランクにあたる。

貴水晶を持てるのは、この魔術が盛んなこの国でも10人に満たないのではないか。

この細身な少年に待ち受けの困難を思い、ミーナは再びため息をついた。

でも、今は私ができることをしてあげたい

そんな思いで少年の後を追つた。

\* \* \* \* \*

「本当はね、印や呪文を覚えて使うものなのー」

「やつぱり・・・」

「でもね、あなたの魔力なら大丈夫だと思つわ

今一人はミーナの執務室におり、  
凛はミーナから魔術の手ほどきをつけていた。

「魔術は『想う』ことが大事なの一」  
「私がやってみるわね」

ミーナが何かを包み込むようにして手を丸める。

「わあ・・・」

途端に温かなやわらかい光が手からもれだす。

「やつてみて?」

凛も、同じよつて手をだし、田を瞑つて思いえがく。

手から光が溢れ、  
優しく一人を包み込んでいる情景を

田を開くと、球状になつた光が一人を包んでいた。

「「「」」

凛だけではなく、ミーナも驚きを隠せなかつた。

(貴水槽をもうつだけの)ことはある。か・・・)

「凛ちゃん、もうこいわよ、術をやめて」

光を散らすよつと半手を振ると  
静かに、流れるように消えて行った。

「ふう……」

初めて使つたこともあり、緊張していたのか  
肩の力が抜ける。

「……凛ちゃん」

改まつた様子のリーナに、  
凛も思わず背筋を伸ばして対峙する。

「あなたに、私が教えられる」とはもつないわ

「え……でも……」

「基礎を確認しよつと思ったのだけれど、必要なかったわね  
「大丈夫。これから入る騎士団でみつちり教えてもらえるわ

不安そうな凛にウインクがとどく。

「わ、ですか……」

「それじゃ、早速あのおやじのところに行きましょう。」

「お、おやじー。」

「アハ。あんなのに凛ちゃんを  
任せたくないんだけど「誰がおやじだ。」

「ひやつー!?

「あーりー 手間が省けたわ」

気配を消していたのか、凛が気づかぬうちに扉の内側には一人の男性がもたれかかっていた。

手は節くれだち、鷹のような鋭い相貌を持ち、本当に・・・

「・・・魔術者なんですか?」

言つた瞬間にぎろりと睨まれ、  
口を手で押さえるが、時すでに遅し。  
標的は凛へと変わつていた。

「なんだ、こいつは」

「ねー凛ちゃんもそり思ひわよねー  
こんなんだけど、魔術師団の団長なのー」

睨まれてもリーナは平然として凛に話しかけてくる。

「だつ、だんちよー・・・」

団長といえど、騎士団の各部門での  
一番の「お偉いさん」である。

すなわち、この国でそれに一番精通している人間  
畏怖の田で、姿をもう一度確認しようとする。

が、未だ睨まれていぬ「ひ」と「まづ」も、慌てて田線を床す。

「「の子はねー凜ちゃん。」

新しく騎士団に入れてもうおつと黙つてー」

「・・・力は。」

「「の子の石は・・・」

「貴水晶よ。」

「なに?」

聞いた瞬間、団長が田の前に迫つていた。  
威圧感に、あわあわと狼狽えてしまつ。

「みせぬ」

「ダメよー去えてるじゃない」

その言葉に田の軀が離れてゆく。

「・・・ふん。まあ、力は関係ない。  
遠慮なく指導をつけさせてもう。」

「あ、お願ひしますー。」

そのまま葉にひよこと立ち上がり、お辞儀する。

「・・・ひよこ。」

「ちよ、ちよっと待つてください」

不機嫌をあらわにする団長におびえながらも、  
凜はミーナに向き直る。

「あの、本当に、ありがとうございました。」  
「迷惑をおかけしました」

ミーナははじからで一番お世話になつた。  
離れるのには不安も残るが、遅かれ早かれ  
別れなければならなかつたのだ。

「いいのよ。あの人、  
不器用だけどいい人だから。心配しないで」

と、ミーナは可笑しそうに笑う。

早くしろ。と団長が苛立つている。  
いつてらつしゃい。とミーナが笑む。

「はいー。」

凜は、振り返らずに、  
部屋を後にした

## 5（後書き）

お気に入り登録が100件を超えてしました・・・！  
みなさんありがとうございます！

感想・誤字・脱字お願いいたします

## 6（前書き）

副主人公（ry）　展開が遅いですね・・・汗  
後半はギャグ風味？

見てくれている方が多すぎる！  
崇めても構いませんかね・・・

団長に連れられて着いた場所は、  
ドームのような、巨大な空間だった。

よくみれば、各部門の騎士たちが鍛錬しやすいように  
薄い透明な膜のようなもので三つに区切られてこらしがわかる。

団長が何か合図をしたのか、  
魔術師たちがざっと壁際による。

「俺のやるとおつてしろ。」

いふなり、団長は何かをぶつぶつとつぶやきだす。  
すると、手の中に炎の塊が形成されていった。  
手を振れば、炎は前方へと飛んでいく。

行き先を田で追つた凜は、遠くにある、小さな的に  
それが当たるのに目を瞠つた。

的は100メートル以上は離れているのではないかうか、  
周りで多くの術者が見ている中、  
これを成功させなければならないのかと思いつと、気が滅入る。

「やつてみる。」

どのみち通りなければいけない道のようだ。  
凜は覚悟を決め、一步前へと踏み出した

団長は最初たかをくくっていた。

魔術には、確かに力の大きさはものをいつ。だが、それ以上にはつきりと「想う」ことと、それを助ける集中力が大切であった。

新人の最初の訓練は、このような衆人環視の場で行つのが定例であつた。

多くの人の目とフレッシャーにさらされながら、どれだけ実力を發揮できるか

殆どの新人はその重圧感に押しつぶされ、呪文の途中でどもつたり、集中できずに失敗する。

(この貴水晶だとかいう坊ちゃんも同じだらう)

そう、思つていた。

凛が、呪文も唱えず素早く、炎を的へと寸分たがわざず当てるまでは

凛は、成功したことに一息つく。

このように大がかりな魔術を使うのは初めてであった。

団長のほうをみあげる。

田は、僅かに驚きのためか見開かれていたが、すぐにそれは何事もなかつたのようになら無表情になる。

「次だ。」

それから後も、凛は団長の後に続いて20ほど魔術を使ってみせた。

「・・・」で待つていろ。」

凛が自分の周りに張り巡らせていた防御膜を取り除ぐのと同時に、団長は足早にドームをでていく。

凛は呆気にとられるが、

魔術を多く使い、少なからず疲れていたため、どこか休めるような場所はないかと周囲を見渡す。

すると、術者たちが好奇心丸出しの田で

凛をみつめているのに気づく。

(う、わ・・・)

凛は思わず身じろぎ、

この場所から早く出てこきたくなる。

しかし、この人たちにもこれからお世話になるのか。と、思い直し、近づく。

「あのー・・・」

術者たちはお互にみあい、

意を決したかのように一人の若い術者が進み出た。

「一つ、聞いてもいいか?」

「ええ、構いませんよ」

好印象を『えてお』いつと、凛はふわりとほほ笑む。  
それはさながら荒野に一輪の可憐な花が咲いたかのようだ、

思わず、術者たちはその笑顔に見惚れ、

（（（（（（いやいや、俺たちにそんな趣味はない…）））  
）））

と全力で否定した。

前に出ていた青年は一番その破壊力の影響を受けたようで、  
凛がしばらく呼びかけてやつと我に返った。

「さつき、高等魔術を無詠唱でやつてたよな

「いつといつまじゅつ? むえいしょ?」

どちらもミーナからは聞いていない言葉であり、

「すみません、それについて

詳しく述べてもうつても…?」

「そ、それはだな『その説明なら俺のほうが上手』  
「いや、高等魔術というのはだな『違うぞお前』」

凛が知らないことに緊張を解いたのか、

一斉に凛の周りに人が集まつてくれる。

集まる術師の中で最初は上手く立ち回つていた凛に  
再び疲労が押し寄せ、  
蹴躡いて転んでしまう。

その弾みにペンダントが服から  
はじきてしまい、それをみた術者が瞠目する。

「あ、わざこしょう・・・」

「おい、お前どうした。って・・・

貴水晶!?!?」

「」「」「」「」「え!?!?」「」「」「」「」

それを耳にした術者たちが一斉に凛の周りから遠のく。

「ハ、これがどうかしたんですか」

凛は困惑し、ペンダントを透かし見た。

・・・と、

「お、行くぞ」

「」「」「団体!?!?」「」「」

団體は凛を立たせ、  
腕を掴み、出口へと引かれていく。

腕を掴み、出口へと引かれていく。

凛は慌てて術者たちに一礼し、

嵐のように一人は鍛錬場から去つて行った。

「なんなんだ、あの坊主・・・」

「人の咳きに、全員が賛同する。

「団長が初期訓練の準備をしろつづから何事かと思えば・・・」

「しかも団長直々に規範となり・・・」

「高等魔術を無詠唱でやつて見せ・・・」

「終いには石が貴水晶だつて・・・?」

「「「「はあ・・・」」」

いきなりあらわれた規格外な美しい少年の正体について  
術者たちが何田も悩んだのは当然のことであった

## 6 (後書き)

毎回同じ事書いているような気がする・・・  
あつたらいご描描お願いします

## 7（前書き）

アドバイスいただいたので、良い方向にもつていけるよう努力しようと  
思います

お気に入りの数が神々しすぎて目に入れられない・・・！

団長に引かずあるよつこじて連れてこられたのは、執務室のよつだ。

机の上には乱雑に書類が積み重なり、とこりうどひに殴り書きのよつなメモが見える。

「騎士の登録をする。」

団長が「アヤソと引き出しの中を漁り、一枚の紙を取り出した。

「書け。」「  
とペンと共に出される。

幸い、ミーナがかけていた魔術は話し言葉だけでなく、文字にも効果があつたよつだ。

みたこともない文字の意味がすらすらと頭に入つてくれる。近くにあつた椅子を台にして書きだす。

項田は、「名前」「年齢」など10項田ほどであった。途中に「性別：男性」と書いてあるのをみつけ、僅かに動搖する。

覚悟はしていたのだ。

周りからは、男として見られる事になるのは。

ただ、そう思つていたのと、

こう文書にして見せられるのは、あまりにも違ひすぎた。

動搖を内面に押し隠し、項目を埋めていく。

最後の「精靈獸」という項目で筆が止まる。

「あの、これって・・・」

「まだ居ないのか?」

無表情の中に驚きの色がみえる。

その反応を見る限り、魔術者には居て当然のようだ。

「は、はい・・・」

団長の話をまとめれば、

精靈獸は、精靈が獸の形に変化したものである。

通常は幼少時に魔力があるとわかつた時点で  
知り合いの術師か、魔術学校（小学校のようなものらしい）の先生  
の監督のもと

召喚陣を行い、契約を行つ。

また、術師の大きさによって精靈の強さが決定される。

術師の力の大きさは一般的には生涯変わることはないため、  
契約した精靈獸は、生涯術者に付き添う。

とのこと。

「まだ、契約していなかつたのか。」

ふむ。

と、団長は考え込むと、

「ついでだ、この機会に行つてしまおう」

「えー?」

凛は驚く。

先ほど、「生涯付き添う」と言つてはいなかつたが、  
そんなに簡単に行つてしまつてよいものなのであらうか。

悩む凛を尻目に、団長は黙々と召喚陣を床に描いていく。

「中に入れ。」

「は、はい!」

威厳に満ちた声に反射的に従つた。

「繰り返せ。レッタ・フォル召喚」

「れつた、ふある?」

その瞬間、目の前が暗くなる。

眩暈がして、思わずその場に座り込んだ。

(なんなんだよ、これ……)

眩暈がおさまり、ゆっくりと目を開ければ、そこには、白い空間が広がっていた。

とりあえず、状況確認もしなければならぬ。そんな思いで立ち上がり、周りをきょときょと見渡す。

周囲には何もなく、延々と白が広がるだけだ。

前に進んでみても、景色は変わることはない。

「・・・誰か、でひこみ・・・」

思わずため息とともにそんな言葉が零れた。

「汝、我を呼ぶか?」

「え?」

周りを見渡しても、空間に変化はない。

「汝、我を呼ぶか?」

再び、声が聞こえる。

重厚で、腹の底に響くような声。

「あの、あなたは・・・?」

「我、精靈なり。汝、我的力を欲するか？」

一瞬戸惑う。

しかし、これが団長の言つていた

「契約」かもしれないことに気が付き、声に応える。

「はい。私に、力を貸してくれますか？」

契約の方法など知らなかつた。

ただただ、この響いてくる声に  
この身を預けたいと心が欲していた。

「承知。名を授けよ。」

「メイシエス。」

無意識のうちに、その名が口から零れた。

「貴方の名前は、メイシエス。」

「承知。我、此処に汝と約束を結ぶ。」

かあつと胸元が熱くなる。

前を見れば、大きな黒豹がこちらをむいて座っていた。  
不思議と恐怖は感じなかつた。

近づいて、鼻面に触れる。

瞬間、視界が暗転した。



## 7（後書き）

長くなつたのでわけました。  
此処まで読んでいただけて本当にうれしいです！

8 (前書き)

前回の続きをです

再び目を開けた時には、  
もと居た執務室の床にへたり込んでいた。

団長が眉根をよせてこちらを向いている。

失敗したのか

不安に襲われ、体の力が抜けてゆく。  
しかし、隣の黒豹が頭をつつき、団長の終わったぞといふ言葉で  
召喚が成功したことを悟る。

「良かつた・・・」

子供でも成功するような召喚に失敗するなら、  
もしかしたら騎士団への受け入れを取り消されるかもしれない  
と危惧していたのだ。

「大丈夫か、リン」

あの重厚な声がきこえる。

思わず豹の目を覗き込めば、金色の瞳が光る。

「君がしゃべつてるの・・・?」

「他に誰がある」

ふんと偉そうに鼻を鳴らす姿に頬が緩んだ。

「お主と我はは喋らずとも、離れていても意思疎通はできる」  
「もつとも、それ以外の奴は言葉は通じんがな」  
とメイシエスが言つ。

(ねえ、めい「真名で呼ぶな」・・・え?)

〔真名で呼んではならぬ〕

理由は分からなかつたが、  
メイシエスがそつ言うのならそのようなものなのだろう  
と、解釈する。

(うーん・・・じゃあ、シエスで。)

頭の中でそう答えるべ、気に入ったのか  
尻尾がぶんぶんと揺れるのがみてて、  
思わず首に飛びつく。

「か、かわいい!」

凜は動物好きだ。それもバカがつくほどに。

元の世界でもそこらにいる猫だの犬だのに懐かれては  
頬をほころばせる姿が目撃されていた。

しかし、「凜様、ギャップも素敵だわ・・・」と

女子たちに密かに観察されていたことは、  
凜は知らない。

「う、うむ。・・・わざからその男が此方を見つかる。  
居心地が悪うてならぬ」

(あ、団長のこと忘れてた)

立ち上がり、少し恥ずかしく思いながら団長に向き直る。  
若干顔色が悪い気がするが、しつかりと立つて居るのを見る限り、  
大丈夫なのだろう。

「・・・大きいな。」

横を見ると、確かにシェスは、大きい。  
凛が立ち上がつても頭は凛の腰程度である。

「それでは田立つ。小さくなるよう命じる。」

「命じる」という言葉に違和感を感じながらも、  
シェスに語りかかる。

(シェス、もう少し小さくなることはできない?)

「何故だ。田立てば我がリンを守つて居ることを周囲に知らしめる  
ことができる。」

シェスは不満げだ。

確かに、体を小さくするのは窮屈そうではある。

しかし、

(お願ひつ。人間もいろいろと大変なんだよ、きっと。  
今後の平穏のためにも、ここは譲れない。)

「お主はまるで自分が人間でないかのような話し方をするな」

シェスは苦笑し、体をみると小さくせつねへ。

変化が終わったとき、そこにいたのはふわふわの毛に包まれた子豹だった。

リンのほうを見上げ、ことこと首をかしげる。

「どうじゃ？」

（かわいすぎるよつ）

抱き込んで撫でたい衝動を抑える。

「それで構わん。」

団長が紙の最後の欄にそりそりと書きこんでやべ。最後に判子を捺すと、紙は一つの銀の輪に変化した。

よく見ると、

一つはシェスの瞳のような金色の、もう一つは凜の瞳と同じ漆黒の口が一つづつ飾られている。

「金のまつを凜、黒のまつを亞麻獣につけらる」

輪はすると腕に通った。

シェスのまつは首輪にするのかな、と見て、

「これ、通りますか？」

輪は凜の拳が入る程度で、シェスの頭が入るとは到底思えない。

「頭にのせてみる」

訝しく思いつつも載せる。  
すると、輪は広がり・・・根元の位置でちよつと良し大きさになつて縮んだ。

「それには魔術がかかっている。  
大きくなつても邪魔になることはない」  
「なお、それは身分証明書の役割も果たす。  
気をつける。」

「ほう、と感嘆しつつも、

「こじが異世界だといふことを再認識せらるる。

「とりあえず、今日はもう休め。  
案内を呼ぶ。」

手を叩くと、執事のような人がやつてくる。

「お呼びでしょうか」

「こいつをあじてる部屋に案内してくれ

執事さんは一度は驚いたように見えたが、  
「承りました」と一礼する。

「アーティスト」

「はーー! あ、お世話をになりました」

凛も団長に礼をする。

せつせと行け

という言葉に見送られ、部屋を出る。

途端、腹の虫が存在感を主張する。

よく考えれば昨日の昼から何も食べていないのだ。

恥ずかしさで顔が赤くなるが、

部屋にはすぐについた。

「執事さんかサンディッチのような軽食を持ってきてくれる。『御用がありましたら』のベルを鳴らしてください」と言って、部屋から出て行つた。

「はあー・・・・

軽食を食べ終わり、

ベジで健康になれるといふことをつぶやく。

〔どうした〕

シェスが尋ねてくる。

「なんか、いろいろあつたなあと思つて。」

「氣づいたら森に居て、剣を向けられて、  
守り人に会つて、魔法を使って・・・」

思わず、涙が一筋零れた。

「だ、だめだね、こんな弱氣でこわや」

「じじじ」と頬をこすりとすると、  
シェスがベッドに飛び乗り、それをとめた。

「我の前では弱氣でもよ。存分に泣け。」

「シェス・・・」

その夜、凛はシェスを抱いて、  
泣きはらした目を静かに閉じた。

## 9 (前書き)

ちょっと今回は説明チックな部分が多いです。  
設定を作りこむのが、自分苦手なことに今更気づきました・・・

窓から差し込む光で田が覚めた。

凛はベッドから下りて伸びをする。

付き添つようにシロスも下りて同じように伸びをするのを視界の端でとらえる。

明るくなつてから部屋をよく見渡せば、

そこは某高級ホテルのスイートルームとでも見紛うよつた高級感溢れる空間であった。

今踏みしめているカーペットはフカフカで、足の下に敷いていることが思わず申し訳なくなる。

家具には纖細なレリーフが掘り込まれ、丁寧な手作業を施している様子を思い浮かべることができた。半ば興奮気味に部屋の装飾や家具を見て回つてみると、こんなことノックの音が聞こえる。

「はー」

「おはよひ、いやこます。お田覚めはいかがですか?」

入ってきたのは、昨日もお世話になつた執事さんである。よく見れば、この初老の執事さんも「ロマンスグレー」といつた感じで、

若こじるこじるかしモテたのではないか、と凛は想像する。

「とても良かつたです！ありがとうございました」

凛はほほ笑んでお辞儀をした。

もと居た世界でも受けられないような待遇である。  
不満など、あるはずはない。

「それはようございました。」

嬉しそうな凛を田にし、執事も頬を綻ばせる。

(「この部屋は客間の中でもあまり良いものではないが、  
客にが喜んでいただけたならそのようなことは関係がない」)

と、当初の目的を思い出し、凛に問いかける。

「ところで、湯あみと食事どちらを先になさりますか？」

「お風呂と、ご飯ですか？」

そうですね、ではお風呂を先に・・・」

「承知いたしました。ではメイドを呼びましょっ

「ま、待ってください！大丈夫です一人で入れます呼ばなくて構いません！」

凛は慌てた。

この服の下にはさらしをまいているし、  
裸で風呂に入れれば性別を偽つていいことなど  
すぐにはばれてしまうだろう。

「？？？承知いたしました。

それでは、着替えを用意しておきます。」

息を荒くしながら一人で入ると息巻く客人に疑問を抱きながら執事は部屋をでた。

「あ、危ない」

思わずベッドに身を投げ出した。

「何がだ？」

先ほどまでの浮かれた様子とは違ひ凛の様子にシェスが寄つてくる。

「……………シェスは私が女だつて」と「知つてある」  
・・・え。」

凛はぱつと身をおこす。

や、そんなに隠せてなかつたが、もう知られているかも知れない  
と不安そうに瞳を揺らす凛に、

「我ら精霊にはその者の本質が見えるゆえ。

心配はいらぬ。そのよひには人間はリンを見ぬ。」

シェスとしては安心させようとして言ってくれたのであらう。

しかし、男装が成功しているという安心感は得られたが、  
残り僅かな凛の女としての矜持が傷ついたのは言つまでもない。

「そ、そりゃ……ありがと……」

僅かに気落ちしているらしく凛の様子をショスは不思議に思つ。

「？？ とりあえず、湯あみに行かねばならぬのではないか？」  
早う行かねば意味がない」

「そうだった！」

凛は慌てて先ほど見つけていた風呂場へと飛び込む。

幸い、シャワー や石鹼などの使い方に差異はないようだ。

体を流す水が見る間に濁つてゆくのを見て  
自分が今までどれ程汚れていたのか自覚した。

もともと奇麗好きな性質である。

既に湯船につかっていたショスに心配されるほど肌をこすり、  
氣の行くまで頭を洗い、

「ふうー・・・」

異世界に來ても、やはり日本人である。  
お風呂や、温泉という類には弱いのだ。

乳白色の湯を眺めながら、ふと思いついた疑問を口にする。

「シーハースってまさか女の子だよな？」

「何をいうおる。我はれつきとした男だ  
信じぬのならここで人型になつても」

「ででけ――――――!」

\* \* \* \* \*

一人と一匹は早々と風呂を出でいた。

シェスの性別詐称疑惑（？）が露見し、  
凛がシェスを風呂場から追い出してしまい、  
このような状況では落ち着かないと、  
後を追うように凛もあがつてしまつたためである。

そういえば、さつき耳慣れぬ言葉を聞いた気が

「シェス、さつき人型つて言つた？」

〔 言つたぞ。我是高貴な精靈故。 〕

「 高貴・・・・? 」

首をかしげる凛にこれしきのことも知らぬのか、と  
シェスは説明する。

〔 精靈にもいろいろとある。 〕

その中でも大きく三つにわかれておる。

一番位の低いもの 低級精靈 は、厄介だな。  
力はそれなりにあるのだが、気の赴くままに動くために  
しばしば術師によつて精靈界に強制的に戻されることもある。

次 中級精靈 はまだよいほうか？

精靈獸になると、精靈の時に持つておった力が半減するのよ。。

ただ、術師の言うことは聞くな。

最後が高級精靈よ。

我の様に自我もある。力も変わらぬし、  
稀に増えることもあるらしい。

だが、もう一つ上にあつてな・・・」

もつたいぶつたようなシェスに凜は我慢できずに  
続きをせつづいた。

「その、一つ上が？」

「我らのような精靈よ。

契約も他のものは喚ばれたならするほかないが、  
気に入ったものとだけするのよ。

力も高級のなぞよりもあってな、10倍はくだらんだりつ。  
我らのみ、精靈獸になつても人型をとることができる。  
ただし、これはよっぽど気に入ったものにしかみせぬ。」

どうだと言わんばかりの説明に、凜は素直に感心した。

「へえー、シェスはすごいんだな

力も人型特典とか面白いと凜はしきりに感心している。

お前のことときに入つておると意外に含めた説明に全く気付かない

凛に、

シェスは密かにため息をついた。

その時、じんじんと本田一度田のノックが聞こえる。

わざわざの執事さんが来たのかと、  
凛は返事をし、扉を開けた

9 (後書き)

此処まで読んでください。あいつがといひやれこますー。

## 10 (前書き)

少し更新遅くなりました  
ついに10話まできました！  
みなさんありがとうございます！

入ってきたのは、執事さんではなく

「お邪魔しまーす」

「・・・」

「あの時の・・・?」

「覚えててくれたんだー」

森で出会った二人だつた。

あの時は、確かに意識を失つて倒れてしまつた。  
ということは、恐らくこの二人が此処まで運んでくれたのだろう。

「先日はお世話になりました。」

一人を椅子に案内し、凛は礼を言つ。

もし、違つたのだとしてもこの二人に迷惑をかけたのは間違いない  
だろう。

「全然いいよー」

と、長髪の人はひらひらと手を振る。

それを不機嫌そうにみやり、口を開いたのは短髪の人だ。

「俺たちが此処に来たのは、魔術師団長から  
お前をパーティーの術師に推薦されたからだ」

「え・・・」

凛は戸惑う。

パーティーのことも、仕組みのことも聞いていた。  
しかし、自分で言つるのは悲しいが、  
こんな どの馬の骨ともわからぬようなものを実践に出してよいの  
だろうか。

「でも、自分はまだ初心者で 」

「大丈夫大丈夫

俺ら結構強いほうでさー、

一人くらいのカバーならどうにかなると思うんだよね

と、いうことで自己紹介

俺が「弓」のケイト・ファンナール・ド・ラメリア。  
ケイトって呼んですよ。

で、こいつの仮面してんのが 」

「・・・ルミル・ラ・フェール・レイチエル」

「で、「剣」。かなり強いんだよー  
レイって呼んであげて。  
で、名前をきいても?」

「あ、はい。篠原凛です」

「リン君か。珍しい響きだね。  
で、これが証明書なんだけど 」

凛が勢いに押され、困惑する間にもことはぢんぢんと進んでゆく。  
口を挿んでも、長髪の人 基、ケイト は聞いてくれないだらう。  
しづがなく、二人を観察しだす。

まず。二人とも俗に言われる「美形」という部類に入る。

ケイトのほうはなんだか貴族という感じだ。

細身ではあるが、騎士であるからには  
きっと体も鍛えてはあるのだらう。

肌も抜けるように白く、白銀の髪もさわやいで、  
女性が羨むことは間違いない。

田は常に細められていて、人当たりの良い笑みを浮かべている。

だが、柔らかではあるが隙のない物腰、  
少し不自然な 軽薄なしゃべり方が  
この人間の本性はほかにあることを示している。

一方、レイのほうはまさに騎士という感じだ。

肌は浅黒く焼けて、灰海色の瞳は冷冽な光を発している。

体も筋肉がついて引き締まつてあり、  
「剣」だといつのも納得できる。

(「ハーフのは、「ワイルド」と書つんだらうか)

と見ていると、視線を感じたのかレイが顔を上げる。目があつて居心地が悪くなるが、直ぐにそらされた。

内心では少しむづとした。

初対面 でもないが、微笑む位のことはしてくれてもよいのではな  
いか。

しかし、先ほどのケイトの紹介の仕方を見る限り、  
これが彼なりの対人法なのかもしれない。  
と自分を納得させる。

「 ところで、これから宜しく…」

説明が終わつたらしい。

手を差し出され、一瞬何をするのかわからなかつたが  
直ぐに握手を求められているのだと理解する。

「 よ、宜しくお願ひします」

「じゃ、俺らの部屋に案内するよ」

「え？ 相部屋なんですか？」

当然別々だと思っていた凛は聞き返してしまつ。

「パーティーは一つの部屋に寝るんだよー  
僕たちと一緒に部屋はいやかい、少年」

一気に悲しそうになるケイト。

「そんなことはないです！」

こんなことでこれから頑張り付かなければとなる人と不仲になってしまっては困る。

そんな思いがこもったからか少し呟くよくなってしまった。

「あははは。希望してくれてうれしいよ。

リン君の荷物は？」

「あ、あのカバンです」

指さす一つの小さな旅行鞄をみたケイトが驚いたように目を見開く。

それも当たり前だらう。

貴族の子であれば、時には馬車一台分も持っていることもあるし、平民の子でも最低大きな旅行鞄二つくらいはあるものだ。

凛の荷物はあまりにも少なすぎた。

凛としては、革できたこのバッグの中身は多いくらいだった。

「貴殿の來ていた服は、ミーナに預ける

」この鞄は活用していただきたい

というメモと共に机のそばに置かれていたこのバッグには服、革製の手袋から、

ありとあらゆる必要と思われるものが詰まっていた。

こんなによくしてもらっていいのだろうか、と凛は逡巡している。

この待遇が、将来有望な、  
身寄りのない魔術師のためであるということは、

もちろん凛は知らない。

「行こうではないか、リン」

シェスが突然ひざの上に飛び乗ってきた。

困惑する凛をみかねてきてくれたのだろうか。

(シエス！・・・でも、大丈夫か？

こんなのが戦えるだろつか・・・)

自分の戦いとは無縁だつた貧弱な体躯を見、  
凛はシェスに問う。

「我がある。危険な時は助けてやるや。」

自信満々でこちらをみつめるシェスに心が屈いだ。

確かに理由なかつたけれど、シエスは自分のことを裏切らない。  
そんな気がした。

「・・・はい。行きましょう。」

シェスと話し合つのを待つてくれていたのか、  
ケイトが此方をにこにこと見つめていた。

「うん。行こうか。」

立ち上がり、短い間ではあつたがお世話になつた部屋をでる。

鞄を持ち、シェスをつれてそのまま歩き出やうとする  
レイが怒つたように喋つてきた。

「精靈獣は「じばつて」おかなくていいのか

「「縛る」・・・？何故ですか？」

「何故かだと、暴走して被害を『えたらビリする』

つつかかるレイをケイトが宥める。

「その精靈獸は「黄金」色だから心配ないよ  
さつき話していたの見なかつたの？」

「うう・・・」

ケイトに言われ、レイは不機嫌そうに速足で先に行ってしまった。

「何かまずいことでも言いましたか・・・？」

「あいつはいつもあんな感じだからさ。  
気にしなくつていよいよ」

早くも暗雲が立ち込めた騎士生活に、  
凛は不安を覚えながらも廊下を歩き続けた。



## 11(前書き)

ケイト君視点です

この前の話でやつと副主人公が出せて良かつた・・・

お、お気に入り登録の数がすばらしいことになつております！  
みなさん有難う御座います・・・（泣

魔術師団長からパーティーの術師がみつかったといつ知らせを受けた時には、何かの冗談かと思った。

この時期には新入りは既にパーティーはきまっているはずだし、僕たちのレベルに会うような術師がこんな時期外れに入つてくるのはタイミングが良すぎる。

でも、団長が言つのだから間違いはないのだろう。

術師がいると言われた部屋は客間だった。客間の中では一番質素な部屋ではあるが、騎士候補が通される部屋ではない。

誰か有力者の斡旋があつたのだろうか。

扉を開けて出てきたのは、

まだ年端もいかぬ小柄な少年だった。

自分で開けたくせに驚いている。

だれかほかの人間を待っていたのだろうか。

そういえば、この顔どこかで感じたところで思い出した。

この前、管理区域にいた子だ。

レイが怒って宥めたり、

後処理や書類が面倒だったからよく覚えている。

向こうもこっちを思い出したようで、  
ソファに座つて此方を見ると礼を述べてくれる。

素直に謝るところを見る限り、  
傲慢な人間ではないのだろう。

軽く自己紹介をした後に話を進める。  
レイがずっと不機嫌だから、早く進めておかないと

話をなかつたことにされかねない。

「冗談じゃない。」

僕らのパーティーに見合つ新人がどれほど希少なことか。  
それがレイの機嫌のせいで失われたら田も当たらない。

口ではペラペラとしゃべりながらも、

少年 リンと言っていた をさりげなく観察する。

まず目に入ったのはこの国では珍しい黒髪と黒目だ。  
顔や雰囲気も、どこか神秘的で、

ここにいるよりも神殿で神官をやつていふ言われたほうがよっぽ  
ど納得できる。

しかし、本当に、これが騎士だろうか。

薄いシャツとズボンの上からもわかる細い手足に  
鍛えたような様子は見当たらない。

いくら少年と言っても、身長も低いのではないか。

しかし、先ほどから気になつてゐるのは  
少年から感じる女性らしさだ。

先ほどまで風呂にでも入つていたのか  
動くたびに花のような香りが熱と共に立ち上り、  
短い髪から見え隠れする白い項は妙な色氣がある。

戸惑つているのか瞳を揺らして所在なさげに座る姿は  
庇護欲をそそつた。

血色の好い薄い深紅の唇と、  
濡れ羽色の髪に触れたいと思つのは、

相手が女性でもない限り、僕が思わないことだ。

細い手足も発達途上なのではなく、  
女性と考えれば納得がゆく。

だが、騎士になる以上そのようなことはありえないだひつ。  
団長のお墨付きでもあるし、心配はない。

ただ、癖は抜けないのか、  
女性に向けるような優しさを少年に見せたことは  
ご愛嬌というものだ。

握手をして驚いた。

手にはあかぎれもまめもなく、  
指は細く、強く握れば折れてしまいそうだ。

苦労した様子が全くと言つてよいほど見受けられないため、もしかしたらお坊ちゃんなのではないかと心配になる。

だが、それでもいいと思え、

ここに来るまでは僅かながらあつた力量に対する不安がぬぐわれたのは、

精靈獣の瞳が黄金であることに気づいた時だ。

瞳が黄金であることは、

召喚した人物が相当な力を持つてゐることを意味する。

また、そのような精靈と契約できたといつことは  
心根も奇麗であるといつことで、

力の大きさだけでなく、ちゃんと精靈術も使えるのだらつ。

また、黄金の精靈獣はほかのものと同じよつて、  
暴走の心配をしたり、「縛つて」おく必要もないでの  
心配の種はまた一つ減る。

説明と書類への記入を終え、

部屋に移るため、リンに荷物のことを聞く。

指された鞄を見て驚く。

最初の坊ちゃんといつ認識は改めよつ。

坊ちゃんがこんなに身軽であるはずがない。

しかし、いくらなんでも少なすぎるのではないか。

僕が入ってきたときだつて、もつ少しはあつたはずだ。

そういうえば、この部屋を使つてゐる時点で違和感がある。

精靈獸とも、他で見かけるような主従関係といった風ではなくむしろ友人・・・？

そんなことを考えた自分に苦笑する。

いくら契約が許された身であつても、よつぽどのことがなれば精靈が親しくするなど考えられない。

精靈は人間を卑小な存在と考えているようでは世の中の大半の人間には相手にしない。

魔術師も例外ではなく、精靈獸の暴走がおこるのもそのためだ。確かに誰だつて精根の腐つてゐる様な奴には従いたくないものだ。

精靈獸の場合、反抗が顕著な形で現れるため、暴走としてとらえられるのだ。

だが、それも違和感を感じさせてゐる一つの要因であることは違いない。

「これで貴水晶だつたら、もつ何も言わないぞう思いながら、客間を後にした。

## 12 (前書き)

これからは更新ひとつになる予定です  
宜しくお願いします・・・汗

着いたのはイメージ通りの部屋だった。  
質素で、必要最低限のものしか置いていない部屋。

広さはそれなりにあり、風呂場なども設置してあるみたいだ。

荷物を居間らしき場所に置き、  
ソファに座り込む。

いくら同じ施設内とはいえ、  
棟も違ったため、相当な距離を鞄を持って歩いたのだ。  
疲れても無理はない。

レイは用があると出かけてゆき、  
今はケイトと部屋に一人である。

「リン君ってどう生まれなの？」  
「家族は？」  
「騎士団に入らうと思つたきっかけは？」

話題としては一般的な世間話ではあるが、  
この世界の常識をまだ知らない凛にとつては  
ひやひやするものばかりである。

「あ、あのー・・・  
その、凛君って呼び方やめていただけませんか？」

朝から、LJの呼ばれ方は「そばゆ」と

感じていたのだ。

「じゃあリンも敬語やめよ！」

「む、無理だと思います・・・」

凛は口が悪い。

と言つが、人に誤解を招いてしまうのだ。

不愛想に訥々と紡がれる言葉は気持ちの良いものではないだらう。

その点、敬語ならば不自由なく使いことができたし、意志を正確に伝えることができた。

「わ。それは残念。」

とケイトが全く思つていなこよつたまつ。

「確かにリンは平民の出なんだっけ

「はい・・・」

確か、話の流れでそのような設定になつていていたはずである。

孤児だったの両親も生まれもわからない。

お使いに行つて絡まれ、騎士に助けられて志した。

そして、性別は、男

少しの真実とうそを織り込みながら話を紡ぐ。

絵本の中のような話ではあるが、一番不自然がない。

嘘をつくことに罪悪感が芽生えたが、

生きてゆくためだ、致し方ない。

「じゃ勉強もしなきやだね、  
本持つてくるからちょっと待つてよ」

そういうとすぐに部屋を出していく。

はあ・・と凛はソファに身を預けた。  
ケイトとはなんとかなかよくやっていけそうだ。  
でも、なんだかレイは自分のことが嫌いなようだ。  
そんなことをつらつらとかんがえていると、  
シェスが膝に飛び乗ってくる。

そういうえばいい天気だ。

こんな日は外を歩いたらきっと気持ちがいいに違いない

手はシェスの滑らかな毛並みを撫でながら、  
温かな陽に誘われて凛はうとうとと眠りに落ちて行った  
凛は幼くて、母の膝の上で物語を読んでもらっていた。  
二人ともとても幸せそうな表情を浮かべている

ああ、これは夢か

母は凛の髪をすきながら語りだす  
むかしむかし、勇敢な一人の騎士と、  
それはそれは美しいお姫様がいました

物語は終わり、母はさらさらと砂になつて消えてゆく。  
幼い凛は泣くのを必死にこらえて母を探し求める。

途中で優しい手が頬を撫でて行った気がする

そこに母のぬくもりを見つけたような気がして、思わずすり寄った。

目を開けると、ケイトがこちらを覗き込んでいた。

「起きた？」

「すみません」

自分のために時間を割いてくれているのに当の本人が眠りこけているなんて。

「今さつき帰ってきたんだけどね。  
気持ちよさそーに寝てたから、  
起こすのは忍びなかつたんだ」

「あと、リンに勉強を教えてくれるジョナスさん」

「ジョナスと申します」

さつき帰ってきたといった。

それではあの頬を撫でて行つた手は誰のものだつたのだろう。疑問を残しながらもジョナスへ礼を返す。

ジョナスさんはもともとレイ着きの使用人だつたらしく、流れでこのパーティーの世話係となつたのだとか。

いつもは身の回りの細々とした世話をしているらしいが、  
今回は凛の勉強のお手付け役として適任といつて抜擢されたらしい。

「誠心誠意、この役目務めさせていただきます」

その瞬間、ジョナスさんの口の端が  
いやつと呻つ上つたのは見ていないことにしておつ・・・

\* \* \* \* \*

それから丸々三日間、凛は地獄の中にいた。

思った通りジョナスさんは相当な「鬼畜」で、  
騎士の嗜みと称して  
この世界のでき方から経済学、政治、果ては法律まで  
きつちりと覚えさせられ、  
凛は疲れ切っていた。

こんなに勉強をしたことではない。  
学校でもなんとなく受けていた授業もこんなに濃厚な内容だった  
のだろうか。  
しかし、爽快感を感じるのも事実だ。  
やりきったという思いが体を満たしている。

「お疲れ様でした」とました

ジョナスがお茶を持ってくれた。

「有難う御座います」

ジョナスと一緒にお茶を飲む。

最初はジョナスは同席ということに抵抗を示していたが、一人で飲んでも楽しくないと凛が頼み込んだのだ。

「これで、ひとまず机に向かつての勉強は終わりです。私の役目も一段落ですね」

「お世話になりました・・・

でもこれからも話せますよね?」

ええ、とジョナスが答え、穏やかに時間が過ぎていく。

「机に向かつての、つて言いましたよね  
じゃあこれからは何をするんですか?」

「ええ、乗馬や剣術、体術、それから」

「ちょ、ちょっと待つてください  
お」  
僕つて魔術師ですよね

「俺」と言つて慌てて言い直す。

ちなみにこの言葉づかいを直すのもジョナスの講義の一環だった。

「魔術師だからと言つて襲われたとき  
咄嗟に対応できなかつたらどうします

「明日からはレイさんとケイトさんが先生ですよ」

「・・・わかりました・・・」

おそれらく明日からもまた続く地獄に凜は小さくため息をついた。

12 (後書き)

10 / 02 前書きに誤字(?)

### 13 (前書き)

これから馬術とか剣術とか体術とか・・・  
が出てきますが、筆者は全くのど素人です

描写で違うところがあつても、  
生暖かい田で見過ごしてやつてください  
その道の方、申し訳ありません・・・

今日から教わるものが運動系のものになる。  
「心配だ」としかいよいよがない。

元の世界でもそれなりにしか運動はできないまではなかつた。  
全くできないうわけではない。  
ただ、何かのスポーツをやつていたわけでもなく、  
鍛えるでもなくできたこの体は、  
騎士としての役目を果たすことができるだらうか

本分は魔術になるだらうが、

昨日も言われた通り、できたことに越したことはない。

不安ばかりが募る。

「心配するでない」

とショスが頬を舐める。

不安を感じて来てくれたようだ。

(でも、不安にもなるだらうへ。)

「問題ない。

お土は芯はできてもおむ。そして肉づけをしていくだけのこと」

もう一度ショスが頬をなめる。

そこから何か温かなものが伝わってきた。

霸氣のない凜を心配する気持ち、自分が勇気がつけられないもどかしさ……

そこ今までいってこれはシェスの思いだと理解する。

(・・・ありがとう)

シェスに頬ずりをしてたちあがる。

こんな小さなことで憂う暇はなかつた。

寝間着からすでに用意されていた服に着替える。  
二人は既に朝の鍛錬に向かつたようだ。

さらしを巻き直すために姿見の前に立つ。

(何だこれ・・・)

右の鎖骨の部分にタトゥーのように何か掘り込まれていて、  
体を近づけてよく模様を見れば、  
何かわからない言葉とバラがデザインされた紋様のようなものだつた。

紋様の色は少し青みがかつたような黒。

「どうしたリンク

シェスが足元で座る。

「我的紋様か。うむ。奇麗に入つておる」

(え?これつて・・・)

〔我が共にゐるところの証よ〕

どうやら契約印のようなものらしい。  
しかし・・・

(これ、入れなおせないのか・・・?)

紋様の入っている位置は、  
下の部分が少しさらしで隠れるほどだ。  
みえるならみえるなりの、  
見えないならみえないなりの着こなしこのものがあるが、

中途半端だ・・・

しかし、それを言えばおそらくシエスは少なからず傷つぐだらう。  
先ほども心配をかけたのだし、この程度のことなら胸にしまつべき  
だ。

着替え終わるとほぼ同時に  
ジヨナスが部屋へと入ってくる。

「そろそろ鍛錬場へ向かいましょう  
案内いたします」

「お願いします」

\* \* \* \* \*

鍛錬場ではすでに多くの騎士たちが訓練に励んでいた。

恐らく一人もこの中にいるのだろうと見当をつけた。

・・・が、如何せん騎士の数が多すぎる。

そこできょときょと探していたが、不意に背後からきた衝撃で膝をついた。

「…？」

「悪いな、あんまりにも貧相だったものでみえなかつた」

振り返ると5人くらいの騎士が凛を見下ろして笑っている。先ほどのセリフは真ん中の気取った騎士が言つたものだらう。

「さすが下男だな、その服よく似合つてゐるぞ」

「こんなやつにはこんな服しか合わないんですよ」

不快な笑い声をあげながら、凛を貶める言葉を吐き続ける。騎士たちの会話から得られたのは、階級のよつなものが服で示されるということ。

傲慢そうなしげさや、言葉づかいを見る限り、この人たちは貴族なのだろう。

さしづめ、みたことのない下つ端の新人をみつけ、いびりにはいったといふことだらうか。

「こんなやつが何故騎士団に入れたんだらうな」「きつと見る目が節穴なんですよ」

それまで無意味な嘲笑を受け流していた凛だが、

その言葉を聞いて怒りがこみ上げる。

自分のことを言つならまだしも、ミーナや、団長のことと懸く言つのは許せない。

「取り消してください・・・」

「む？」

「取り消してください！」

ほかの人のことまで悪く言つるのは違つと思こます」

立ち上がり、凛は叫んだ。

基本凛は懐が広い。

めったに怒ることもしなかつたため、自分でも声をあげた自分に驚いていた。

「何だと！」

「アスター様にたてつくなど！」

取り巻きの一人が拳を握り、

そのまま凛の顔へと向かってくる。

殴られる・・・！

・・・と、

「フーーーン」

皿をつぶすらと開ければ、

笑顔で手をぶんぶんと振りながら走るケイト。

騎士たちはそれをみるなり顔を青くし、  
脱兎の「」とく立ち去つた。

「お待たせー僕らの鍛錬はあっちでやるよー

「はい・・・あの、ありがとうございました」

「何がー？」

前を向きながらにこにこと笑うケイト。

わかつていて、わからないふりをしているのだらう。

多分、あのままいけば凜は立ち上がる」ともできないほどに  
痛めつけられていた。

途中で通り過ぎていく人も、興味がないといったかのようす  
助けるでもなく過ぎ去つていった。

「・・・いえ。何でも。」

「なら良いけどー」

連れてこられた場所にはケイト以外誰も居なかつた。  
土が敷き詰められ、鍛錬場として設備を整えられていた  
先ほどの場と趣向が違つようだ。

森を切り開いてそのまま場としたかのよつなそこのは  
多くの精靈たちの気配らしきものが感じられた。

恐らくは好奇心に惹かれてやってきたのだろう。

「それで、何をするんですか？」

「まずは体術だよねー」

体術を会得し、基礎を整えたうえで剣術などの他の物へとつるらっこい。

「今日は僕が講師だよーよろしくー」

「よろしくお願ひします」

\* \* \* \* \*

ここにこと笑うケイトにほつとしたのは事実だ。  
しかし、そのケイトの本性を見誤っていた・・・！

「リン、軸がぶれたよーあと20分追加ねー」

微笑みを絶やさず指示を出す姿は鬼にしか見えない・・・

訓練内容はじつと座り続けるものから、  
同じ型を延々と繰り返すもの、  
ケイトに型を教わる・・・等様々だ。

しかし、それらどれもが凛を精神的にも体力的にも疲労させた  
ということは言つておこつ。

時には鍛錬が終わるなり意識を失い、

ケイトがジョナスに「なぜか彼はやつを殺められたと言われてた。」

ケイトに一通り話ができるようになったことを  
認めてもらえたまで、それは続いた・・・



よつやくケイトからお墨付きをもらい、

凛は次の武術の指導を受けたことになった。

### 服がいつもと違う

今までズボンは木綿のような素材で、

それに同じ生地のゆつたりとしたシャツだけであった。

靴もメイドが履いているものと同じような軽いもので、何かに対しても特化したような雰囲気は見受けられなかつた。

今日、準備されているのはいつもの服に加え、革のライダースジャケットのようなもの。

靴も編み上げブーツのようで、少し重い。

凛が心配したのは、この上着によつてでてくる体のラインである。

今までゆつたりとしたシャツだつたため

誤魔化せていたが、この上着は少しきついくらいで

しつかりとボタンを留めると体の線が露わになつてしまつたのだ。

さらしを巻きつけて男の体に近づけていても、

その華奢な体躯は隠せるものではない。

凛は誰かに見とがめられるのではないかと

戦々恐々しながらも、新しい訓練に胸を膨らませていた。

対してシェスは不満顔である。

訓練の間は部屋に籠つていなければならぬのだ。

前に出ようとしたところをジョナスに発見され、  
酷い目にあつたらしい。

今までのケイトの指導の時も同じであつたため、  
相当ストレスがたまつてゐるようだ。

「気にくわぬ。何故我がこの様な箱に閉じ込められねばならぬ」

ふんと鼻を鳴らしてベッドに

寝そべるシェスを宥めながら凛は着替える。

(終わつたら庭園へ行こう。それまで待つてくれ)

外出をしようとするが何故か三人から止められてしまつて、凛が  
行くことを許された場が「庭園」である。

宿舎の裏にある空き地は庭園とは呼ばれているものの、  
観賞用の草花の類は全くない。

凛と一緒にならばシェスも外へと出られるため、  
人もあり来ず、自由に使えるこの空き地を  
凛とシェスは運動場として利用していた。

「・・・うむ。早く戻つてくるがよい」

(わかつてゐる。じゃ、行つてくるから)

不満顔ながらも見送ると、言ひて尾を振るショスに  
これが本当に氣位の高い精靈なのかと苦笑しながら  
凛は部屋を出た。

\* \* \* \* \*

ケイトのときと同じ森の中へと向かつ。  
其處に居たのは

「レイー。」

「遅い。」

相変わらず不機嫌そうに腕組みをし、  
木にもたれて此方を見ている。

もしかしたら見知らぬ騎士が指導官になるのではと  
不安であつたが、無用であつたようだ。

見れば、レイの服も似たような上着にブーツだ。  
ただレイのものは真新しい凛のものとは違い、  
何回も着られたのか、こなれている。

「レイは何を指導してくれるんですか？」

「乗馬だ。行くぞ。」

「え、ど、ど？」「？」

凛が向かうなり、レイはさっさと森の奥へと歩き出す。

よく見れば、地面には獣道程度に「うつすり」と  
草が踏み分けられた跡があった。

「厩舎に決まっているだろ?」

「馬を、選ぶ、んですか」

歩く速度も速いが、嫌味かと思うほどに足の長いレイに  
置いてゆかれそうになつて凛は小走りになる。

「乗馬の経験は」

「ない、です」

舌打ちが聞こえた気がする。

しかし、これは仕方のない」とともいえる。

ケイトは一回も嫌な顔をしなかつたが、  
それはケイトの表情に「微笑み」というものが標準装備されている  
からだらう。

断じて慮めて遊んでいたのだとは思いたくない。

レイとしては、こんな坊主の指導よりも

一人で鍛錬でもしていたほうがよっぽど有益だらう。

「すみ、ません」

「何がだ」

レイは振り返らずに答える。

「レイモ、こんな、こと、したくは、ありますご、よね  
「だから、謝るつと」

「俺は弓を放けた。だからやる。

「いけいけやいけいけ。」

凛は呆氣にとられる。

文句の一つでも言われるかと思っていたのだ。  
しかし、氣を取り直してありがとうとほほ笑んだ。  
ちなみに日本人の個性上、凛もほほ笑みは標準装備である。

(血りの言ひ声) おれのなら、  
しっかりと練習に打ち込んで早くできるようならなければならない  
と思巻く。

そのためか、レイの耳が僅かに赤くなっているのは気が付かなか  
った。

そのまま歩くと急に視界が開ける。

厩舎は右側にみえる木造の建物だ。

目の前に広がる牧場のような草原で馬が草を食んでいた。

「おお、レイさんか。 今日はどうしたんだい?

今日は馬の口じゅなかろつ

此方へ向かつてきただのせおそらく厩舎番なのである。千し草を運んでいたよつで、ワゴンを押していく。

「ああ。ここでの馬を。」

「へえ。じゅうりの坊ちやんかい」

厩舎番は凛へと皿を向ける。

「うーん、こんなに細いのは久しぶりだねえ  
今つ子は頑るかね」

厩舎番はワゴンを押しながら厩舎の中へと入っていく。  
続いたレイに、慌てて凛もついて行つた。

し、進展が遅いですね・・・汗

馬房内は予想以上に広々としていた。

中に200頭以上は居るのではないだろうか。  
一頭一頭のスペースも充分にとつてあり、  
敷いてある藁は清潔で、  
とても住み心地が良さそうだ。

「あとは頼んだ」

レイは迷いもなく前方へと歩いていく。  
つっこいつゝとある凛を厩舎番が止めた。

「レイさんは自分の馬のところに行くみたいですね  
お前さんは馬を選ぶんだね？  
ならつっこひくな」

厩舎番はレイが行った方向とは違つ、  
右の細い通路へと入つていく。

凛は慌てて後を追つた。

「あつちはもう持ち主が決まつてゐる馬が居るといでね  
いづちが選べる馬のこゑといふわ」

着いたのは一瞬見ただけでは先ほどと変わらなかった。しかし、先ほどは仕切りに名前のようなものを書いたプレートがつ

こちらにまつていいない。

おひりへ、あのプレートがその馬の所有者を示しているのだひつ。

いていた。

「じりゅうひ選ぶんですか？」

「わうわな、選ぶところよりかは

騎士さんほ馬に選ばれるのさ。」

これでは、某 頸に傷のある男の子の物語の中で  
杖と同じではないか と凛は思つ。

「馬が、ここつを主人にしてもこことと思つたら  
その馬に乗れるんだ

認めてないやつが乗つても一個も従いやしない」

「一頭一頭触つて行つてみな

時間はあるだろ？」

その言葉に頷き、凛は前へと足を踏み出す。  
一番近くに立た馬の鼻面に触れみつとする。

が。

「あつ

馬はこやいをするかのよつこ

首を振り、馬房の後ろへと下がつて行つてしまつ。

氣を取り直し、進んでいくが

どの馬も似たような反応で、

もしかしたら馬に嫌われているのではないかと挫けそうにな。

厩舎番は既にその場を去つており、  
凛だけが馬と向き合ひつ。

残り一頭となり、  
もう黙りかもしれないと半ば諦めに入りながら  
凛は手を伸ばす。

また、逃げられてしまうんだり

と、手に湿った何かが当たる。

視線をあげれば、円らな瞳が見つめ返していた。  
強い意志を持つてこちらを見返してくるそれに  
凛は時間が止まつた気がした。

(認めて、くれるのか)

【ええ】

思わず語りかけていたが、  
返答があるとは思わず、思わず後ずさつた。

途端に声は聞こえなくなる。

おぞるおぞるもつ一度触れると、  
あきれたような声が降つてくる。

【認めないほうが良かつたですか？

折角久しづぶりに認めてあげよつと思つたのに

【

「いや、嬉しい！」

「ありがとう。ありがとうー。」

「ん？見つかったのかい？」

声が聞こえたのか厩舎番が歩いてくる。  
その顔は凛が撫でて居る馬を見て驚きの色で染まった。

「や、そいつかい？」

本当に、それでいいのかい？」

他の厩舎まで行けば、もつと他に持ち主のいない馬は居たのかもしれない。

しかし、凛はこの馬に魅せられてしまっていた。

空の様に優しい田。シェスと同じような艶々とした漆黒の毛並み。なぜか、この馬以外には自分の馬は居ないとまで思えた。

「ええ、いいんです。

この子が良いんですね。」

【それは光榮なことですね】

優しい田で馬を見つめ、言い切る凛、「一つため息をついて厩舎番は口を開く。

「…・わかつたよ。

おまえさんがそこまで言つたのない

「レイさんは外で待つてる。

道具を貸してやるからちょっと待つてな

厩舎番は外へと走っていく。

再び一人（一人と一匹）だけになり、  
凛は鼻に触れて話し出す。

（本当に、ありがとう。  
それで、名前を聞いても？）

【ノーライルです。  
イル、とお呼びください】

少し誇らしげに名前を告げるイルに  
笑みを浮かべる。

（イル、な。  
これから直しく。）

【それで、不躾とは存じますが、  
貴方は男性の方なのでですか・・・？】

困惑したような瞳を見て、  
凛ははつきりと答えた。

（女だ。  
訳があつてこんな恰好をしている）

【やはり、そうでしたか！  
動物としての本能が何か違うと告げていましてね。  
良かつた良かつた。  
」のような方を主人にできるなんて幸せだ。】

むを苦しい男共が来ても従わなくて良かつた  
あの汚らわしい手に触れられるかと思うとぞつとする

】

(・・・イル?)

【 あのような虫けらなど

おつと、これは申し訳ございませんでした】

途中から素の部分が垣間見えた気がする。

だがここは見て見ぬふりをするのが日本人の美德といつものである。

(・・・自分は一回も乗馬経験はないんだ。

大丈夫だろうか?)

【心配は無用に御座います。  
全身全霊サポートいたします】

そのままイルに乗馬時のコツなど教えてもらひ。  
一通りの知識を頭に詰め込んだところで  
厩舎番が大儀そうに何かを運んでくる。  
おそらく、鞍や鐙の類だろう。

まだつけ方は分からなかつたため、  
厩舎番に教わりながら取り付けた。

準備が終わり。

よつやく凜は、レイが居るという訓練場へと向かつた。

凛を送り出した厩舎番はため息をついた。

あの馬は、前の持ち主が戦死するまでは引く手あまたの名馬であった。

しかし、それ以外の騎士には見向きもせず、  
時に攻撃することさえあつた。

このまま、厩舎の隅でくたつてこくのは勿体がないとは思つていた。

しかし、あのよじに細い子の手におえるだらうか。  
時の戦神を勝利へと導いたあの馬を。

だが、どうせ今までと同じように振り落とされてしまうだろう。  
その時はまた新しい馬をつれてきてやる。  
ひとまず、あの子が音をあげて逃げ帰つてくるのを待とうぢやない  
か。

そんなことを考えながら

訓練場へ向かつた厩舎番が田にしたのは、  
想像とはかけ離れた光景であつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8580w/>

---

騎士と鈍感っ子（仮）

2011年10月7日21時26分発行